第８回市民説明会（オープンハウス・説明会）

【実施概要】

１．日時・場所

８月 27 日（日曜日）　サッポロファクトリー（中央区北２条東４丁目）

オープンハウス　10 時 00 分　～　17 時 00 分

トークショー　　14 時 00 分　～　15 時 00 分

説明会　　15 時 30 分　～　16 時 30 分

２．来場者数

310 人程度（内訳：オープンハウス　約 270 人、トークショー　約 30 人、説明会　約 10 人）

３．当日の様子

４．オープンハウスでいただいた意見

〈期待の声〉

・応援している。選手のために絶対に開催してほしい。

・マイナーな競技を振興させたい。札幌市だけでなく、北海道全体で選手の育成などを盛り上げてほしい。

・直接観てみたい。

・東京大会の反省、守りの対応ではなく、わくわくする内容を発信するべき。

〈不安や懸念の声〉

・収入を超える費用が発生した場合に、支出を調整し収入の範囲内で行うというのは無理だと思う。

・月寒体育館は新しいところに建てるのではなく、今のところに建て替えるべき。

・月寒体育館の改修は行う必要がない。スケートやアイスホッケー等は札幌ドームで開催すれば良い。

・改めて意向調査を行うべき。

・2016 年から 2022 年で意向調査の結果賛成が減ってしまったが、どのように回復していくのか。

5．説明会でいただいた質問や意見

・各区の議員は市民から選ばれた議員である。議員も市長も含めて、早く住民投票を条例化することを承諾してほしい。

・まずは住民投票を行うべきであり、このような説明会をしても無意味。

・地下歩行空間の柱巻き等の経費はどこから出ているのか。まずは住民投票をしてから行うべきことだと思っている。

・予備費に 200～400 億とあるが、これを超えた場合、税金を使わず東京の国立科学博物館のように寄付金で賄うことはできないのか。

6．トークショー

「オリンピック・パラリンピックの開催と子どもたちの未来」

（1）トークショー登壇者

【ゲスト】

伊藤 みきさん（フリースタイルスキー・モーグル オリンピアン）

阿部 夕子さん（株式会社 Mammy Pro 代表）

阿部 雅司さん（スキー/ノルディック複合 オリンピック金メダリスト）

【ＭＣ】

松本 かおりさん

（２）当日の様子（写真）

（３）発言要旨

①子どもたちとスポーツを通じた自身の関わり

【伊藤さん】

最近の子どもたちは、体力がないというよりも、好き嫌いがあるので、スポーツをすることにどう誘導してあげられるか。

「楽しい」が上回ると喜んでやってもらえるので、スポーツをやろうというよりは、遊びの中で、結果スポーツが楽しくなったというところに持っていく工夫が、指導者や大人側に課せられているすごく重要なポイント。

私たちは「強くなったら楽しい世界がある」と考えがちだが、強くなる前に楽しい世界をどんどん見せていかないとダメだと感じている。

【阿部雅司さん】

「楽しい」と気づかせてあげることがとても大事。そういうチャンスを提供できるような「DO！スポ KIDS」という事業を手掛けているところ。

【阿部夕子さん】

自分の子どもの適性を見極めるのは親としても難しい。私たちの会社では、そうしたきっかけづくりのイベントを開催しており、祖父母から孫まで 3 世代で来場する様子も見られて微笑ましい。

②スポーツの価値と子育て

【伊藤さん】

親になって改めて、スポーツの価値というものを再認識している。まずは大人・親の私たちが、子どもたちにスポーツに触れる機会や見る機会をどれだけ提供できるか。

その上で、子どもたちの言語化できない、もどかしいストレスみたいなものを、いろんなスポーツに触れて、自分の能力を試していく中で、少しずつ「これ合わないな」ということも含めて知ることが、自分を知ることに繋がっていく。

【阿部雅司さん】

自分は子どもに救われた。競技を辞めそうになった時に、子どもを授かり、もう１回頑張ってみようという真の原動力となった。その結果、金メダルを取ることができたので、いま手元にある金メダルは「みんなに取らせてもらった」という恩返しの気持ちで、できるだけ多くの方に触れてもらいたいと思っている。

③オリンピック・パラリンピックの価値と地元開催への率直な思い

【阿部雅司さん】

本当に皆さんに伝えたいのは、選手たちが一生懸命やっている姿、それを見てほしい。東京大会の時もそうだったが、あの感動や悔しさというのは、やっぱり生きる糧というか、それでエネルギーを貰っていたのではないかなと。選手が頑張っている姿で感動をもらうって「ああ、こういうことなんだ」と、逆に現場を離れてから感じるようになった。

【伊藤さん】

長野大会で里谷選手が金メダルを取って、ぐっと認知度が高まったタイミングで競技をやらせてもらえた。マイナー競技がメジャー競技に変わる瞬間を肌で感じた。

私はオリンピックに４回挑戦したが、４回目に日本代表に選ばれなかった時に「私はこの４年間、人生の素晴らしい時間を過ごした」と思えたこと、これがオリンピックの価値だと感じた。

その瞬間は悔しくて涙も出なかったが、挑戦することの素晴らしさ、一生懸命に身体と心を使って、工夫して取り組むこと。そういう舞台を作ってあげることが、大人の役目であるのかなと思う。

せっかくこれだけ天然雪が豊富な札幌という街で、子どもたちが輝ける場所を、自分もワクワクした気持ちでお手伝いできたら良い。

オリンピックを生で観戦した時の感動を、私たち大人が勝手に価値をつけるのではなく、次の時代を作っていく子どもたちがどう感じるかだと思う。

【阿部夕子さん】

その舞台を市民みんなで見守りながら、意見を出し合って、ゴールにたどり着けたら良い。そういうプロセスが、まちづくりの一つにつながっていくのではないか。

もしオリンピックが札幌で行われるとなった場合に、やっぱり自分の街で、選手の息遣いをきけるというのは、一生に一回あるかどうか。もしかしたらそのスポーツ選手を見て、将来自分もなりたいと思う子どもたちが出てくるかもしれない、そういう夢は描けるんじゃないかなと思う。

④オリンピック・パラリンピックが子どもや親、人にもたらすもの

【阿部夕子さん】

今日、私は二人のアスリートに囲まれていてエネルギーを貰っている。人生の中で生きていると、嫌な思いをしたり悔しい思いをしたり、これからどうやって生きていこうと悩むことは誰しもあるもの。そんな時にふと、頑張っている選手たちのことを思い出して「自分も頑張れるかもしれない」と勇気に繋がることがたくさんあると思う。

お母さんお父さんたちはもちろん、子どもたちにもその瞬間を味わってほしい。オリンピック・パラリンピックを生で見た子どもたちが、自分が大人になった時に、さらに自分の子どもたちに語り継ぐことで、周りの人に良い影響を及ぼしてくれるんじゃないかという期待がある。

【伊藤さん】

子どもは可能性が無限大。ただ大きくなるにつれて、できない・やらない理由をどんどん探しはじめて、「こんなもんだよね、私たち」という風になってくるもの。

自分の身体で可能性を表現してくれる選手たちをみると、人はどこまでも可能性の塊なんだと気づくはず。もし札幌でオリンピックがあった時には、そういう舞台を生で見られる。

子どもたちには「どうせできないんだ」と思ってほしくない。自分の人生や生き方に対して、どうやったらできるんだろうって。「あの人が出来てるんだから頑

張ろう」という前向きな力を、オリンピックの舞台から生で感じてもらえたらすごく嬉しい。

オリンピックの外側の部分で、大人がもっとしっかりしてほしいという部分はもちろんあるが、そういった見直しも含めて、新しいオリンピックの価値を創造していく、そのひとつが次の札幌オリンピックであれば良いなと思う。

⑤子どもたちとの関わり方や学び・感じてほしいこと

【阿部雅司さん】

日本人だけではなく、頑張っている全ての選手たちを応援してもらいたい。

自分が金メダルをとった時、ノルディック複合はノルウェーの国技でもあったのに、僕たちにすごく暖かい応援をしてくれて、喜んでくれた。相手のことを本当に称えてくれる、オリンピックは何かちょっと違うなと感じた。

もし札幌で行われた時には、子どもたちにも、そんな風に応援をしてもらいたいなと願っている。それがまさに学び感じてほしいこと。

【阿部夕子さん】

オリンピックへの関わり方は色々あるが、応援することもそのひとつ。応援はその人を好きになるということでもあり、自分自身ができることは何だろう、と想像を膨らますことでもある。

これは、社会に出た時にすごく重要な力であり、役割になる。必ずしもみんなが表舞台に出られるわけではない。社会の仕組みというのは、裏舞台も必要不可欠なもの。それぞれの役割があって、ひとつの物となっていくので、そういった学びや経験が自分の人生にどう繋がっていくのか、オリンピック・パラリンピックを通じて子どもたちが学び・感じられたらと思う。

⑥まちの未来へ向けたメッセージ

【阿部夕子さん】

札幌は「雪」というのが、どうしても市民の私たちからすると「負のイメージ」がある。例えば子育て中であれば、冬の期間はベビーカーを押せないとか、それがストレスになったりする。

オリンピックが冬に行われることによって「未来につながる雪の使い方・扱い方」みたいな感じで、雪に対する考え方が変わるきっかけになれば良いと思う。

【伊藤さん】

きっとこれが、札幌の街が変わるタイミングだと感じている。いろんなママ友達と話をするなかで、みんなが口を揃えていうのが「子どもたちのために、何かしたいよね」という前向きな言葉。

私も選手時代は、自分自身の能力をどう発揮するかということばかり考えていたが、親になって思うのは、レガシーとして、子どもたちに、次の世代に何を残したいかということ。ソフトな部分もハードな部分も。

「いま、この街は何を繋いでいくのか」という大切な時期に、札幌市に住んでいることに大きな喜びを感じている。これからも一市民として、みなさんと一緒に考えていきたい。